

学 年	教科等	題材名	日 時
第 6 学年	音楽科	アンサンブルのみりよく（第 6 時）	令和 7 年 6 月 30 日（月）

1 本時の目標

思いや意図に合った表現をするために、グループの仲間の歌声を聴きながら、声を合わせて歌うことができる。

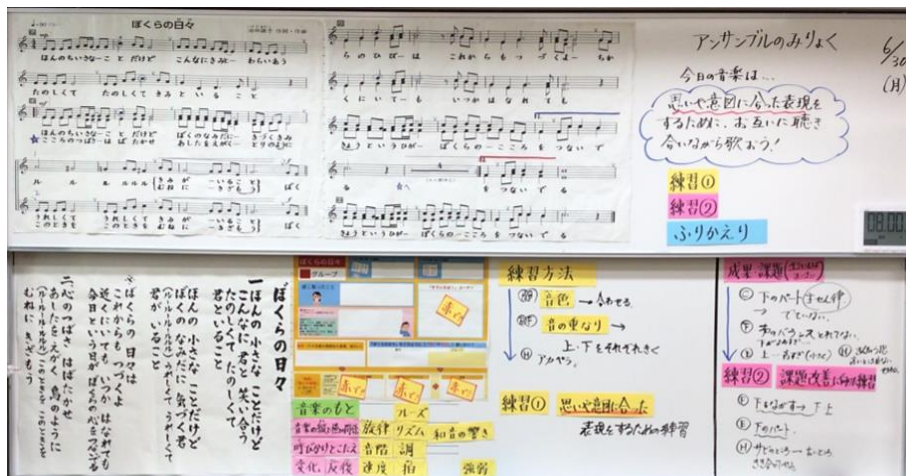
2 本時の指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 全体で合唱し、本時のめあてを設定する。 ○ 全体での合唱 ○ 本時のめあて 思いや意図に合った表現を工夫するための練習をして、お互いの声を聴き合いながら歌おう。 2 本時の学習の見通しをもつ。 ○ 練習①（思いや意図に合った表現を工夫するための練習） ○ 練習②（課題改善に向けた練習） ○ 本時のふりかえり 3 自分たちの思いや意図に合った表現を工夫するための練習方法を見通し、練習をする。（★） ○ 練習方法の見通し ・「最初のところをなめらかに優しく歌うために、声の響きをそろえる練習をしてみよう。」 ・「うれしい気持ちを表現するために、かけ合いのところをよく聴き合いながら歌ってみよう。」 ○ 思いや意図に合った表現を工夫するための練習 ・「もっと声の響きをそろえたいから、〇〇さんの声の出し方をまねしてみようよ。」 ・「それぞれの声をよく聴きたいから、上のパートと下のパート別々で歌ってみよう。」 4 成果や課題についてグループで共有し、新たな練習方法を決めて練習する。（★） ○ 成果・課題の共有 ・「全体的にもう少しやわらかい響きにしたいからささやくように歌ってみようか。」 ・「お互いの歌声を聴きながら歌えたけど、もう少し強弱をつけた方がいいと思うよ。」 ○ 課題改善に向けた練習 ・「ささやくように歌ったら、声の響きが揃ってきて、なめらかで優しい感じになってきたね。」 ・「強弱をつけてみたら、うれしい気持ちがどんどん膨らんでいく感じになったね。」 5 本時学習をふりかえり、次時への見通しをもつ。 ○ ふりかえりの共有 ○ 全体での合唱 ・「グループで練習したことを、みんなと歌うときにも表現してみたいな。」 ○ 次時の見通し	○ 前時学習したことや自分の課題をふりかえった後に、全体で合唱させることで、自分たちの思いや意図に合った表現ができているかを確認し、本時のめあてにつなげることができるようにする。 ○ 練習①（思いや意図に合った表現を工夫するための練習）と、練習②（課題改善に向けた練習）を行うことを伝えることで、見通しをもって本時の学習を進めることができるようにする。 ○ 活動に入る前に、どのような練習が考えられるかを問い、いくつかの例を全体で共有することで、練習方法の見通しをもつことができるようにする。 ○ 感じ取った曲想やグループの思いや意図についてふりかえる時間を設定することで、それに合った表現を工夫するための練習方法を決めて練習することができるようにする。 ○ 机間指導の際は、グループの思いや意図に合った方法で練習しているかを確認し、アドバイスすることで、自分たちの表現を客観的に捉え、表現を変容させるきっかけにすることができるようにする。 ○ 練習①の後に、自分たちの表現の成果や課題等についての学習プリントへの記入を促すことで、ふりかえりを顕在化させることができるようにする。 ○ 成果と課題について仲間と共有する時間を設定することで、自分たちの表現について見つめ直し、新たな練習方法を決めて練習を進めることができるようにする。 ○ 課題を適切に捉え、改善しようとしているグループを紹介することで、自分たちのグループの課題をふりかえり、練習方法の方向性を見いだすことができるようにする。 ○ 最後に全体で合唱する時間を設定することで、本時グループで練習してきたことを意識して歌い、本時の学習の達成感を味わうことができるようにする。

3 本時の評価規準

自分たちの思いや意図を基に、思いや意図に合った表現をするための練習方法で練習し、仲間と声を合わせて歌うことができている。
(知識・技能)【行動観察・記述分析・演奏】

4 板書等



優しく歌おうとして声が小さすぎたり、声が小さいから、少しだけ大きくしてしまおうと、元気になってしまう。「優しく歌う」ではなく、「元気に歌う」になってしまう。

全体的に声量が小さいから、バランスを意識しながら、声を大きくする。聞いている人を感情移入させるために(歌に引き込むために)強弱を意識する。

歌えるには歌えるけれどやや揃わない。揃えれば緊張感は伝わる。

【展開段階での子どものふりかえり(記述)】

5 指導講評

宮崎県教育庁 人権同和・生徒指導課 有田 雅代 指導主事

- 学習指導要領解説には、「曲想とは、その音楽に固有の雰囲気や表情、味わいのことである。この曲想は、音楽の構造によって生み出されるものであり、『音楽の構造』とは、音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合いである」と記述されている。子どもが、歌詞と楽譜から曲想をどのように捉えたのかということが、思いや意図、表現の工夫に大きくかかわってくる。曲想をどのように捉えさせるかということについて、さらなる工夫が必要である。
- 指導案に記述されている「思いや意図に合った練習」を実現するためには、それぞれのグループがもった思いや意図や、表現における課題に対して、楽譜を基に「どの部分をどのように工夫する」という活動が必要であると考え。今回は、学習指導要領解説に示されている「曲の特徴にふさわしい表現を工夫する過程において」という点が抜けていた。「音を響かせ、音の重なりを感じられるように歌いたい」という抽象的な思いや意図はあったが、それに対する具体的な方法について、楽譜に立ち返らせて考えさせる必要がある。
- ふりかえりの顕在化については、評価にもかかわってくる。子どもの書いた文章を基に評価することは考えられるが、文章で表現されていなくても評価していく場を設定する必要がある。そのためにも、ふりかえりの内容を焦点化し、グループにおける個々の表現を評価するなどの工夫が必要である。
- 子どもは常に「上手になりたい」という思いをもっている。教師が表現を工夫させたいと考えるのであれば、子どもが必然的に「工夫したい」と思うことができるような手立てを考えながら授業を組み立てていく必要がある。技能は、その過程において習得させていくことが大切である。

6 考察

【研究内容1：曲想に合った表現へと変容させるための手立て】

- 意識が技術面の向上に偏りがちになり、曲想に基づいた表現へのアプローチが曖昧になった。したがって、子どもの思いや意図と曲想とを結び付けたうえで表現するための、より具体的な目標をもたせたり、曲のなかでも範囲を絞って表現の変容へとつなげさせたりするなどの工夫が必要である。
- 子どもが思いや意図をどのように捉えているのかを再確認し、表現を変容させていくための段階的な授業計画について検討する必要がある。

【研究内容2：ふりかえりを顕在化させ、表現の変容を実感するための手立て】

- 子どもは、ふりかえりながら思考を整理したり、仲間と共有したりすることで、自己の学びを深めることができる。そのよさを子どもが実感できるよう、ふりかえりを言語化するタイミングやふりかえりの視点等を教師が具体的に示す必要がある。
- ふりかえりの顕在化の方法(言語化、文字化、観察、発表)と、その効果について再検討する必要がある。